

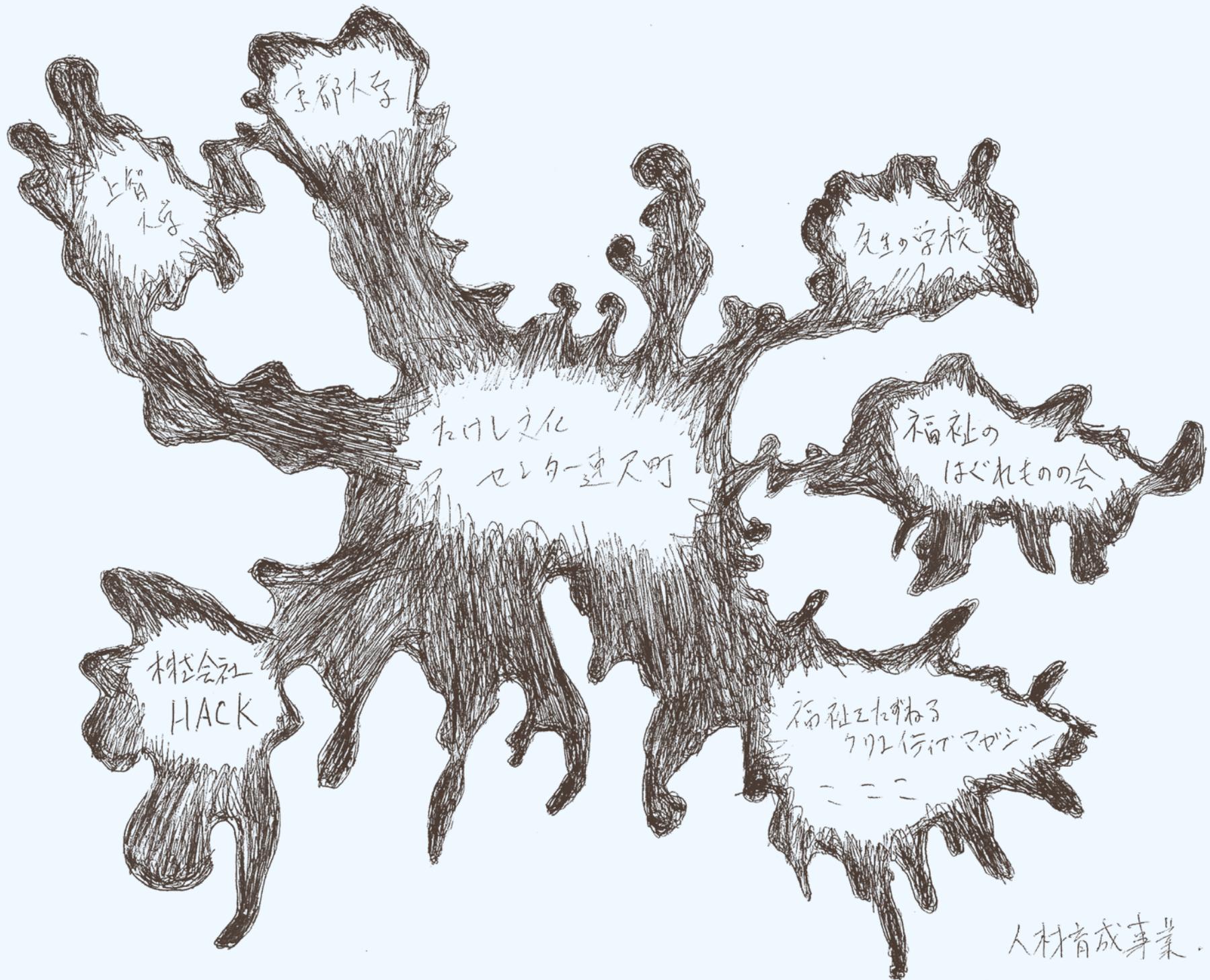


# #3

## 「表現未満、」 の場を学びに

ラーニングプログラム開発  
タイムトラベル 100 時間ツアー

知的障害者の行う「表現未満、」を体感することは、健常者と呼ばれる人たちにとって「学び」になり得るのではないか。またその逆に、その出会いは知的障害者の「表現未満、」にも何がしかの影響力を持ち得るのではないか。そのために「知らない人たちが混ざる」こと、出会い、互いに知り合うこと。福祉を学ぶ上智大学の学生を中心とした学生グループ、福祉をたずねるクリエイティブマガジン「こここ」、教育メディアコミュニティ「先生の学校」、株式会社 HACK などの各団体が、各分野でいま必要としている知を獲得するために、知的障害者の「表現未満、」を体感できるたけし文化センターを題材に、それぞれのやり方で研修・合宿等を行った。



人材育成事業・図

ラーニングプログラム開発 年間スケジュール

日付	できごと
6月27日	先生の学校 オンライン講座(プレイベント)
8月19、20日	未来の先生フォーラムポスター発表
8月20日	未来の先生フォーラム講演 『「ちがい」が学校をやわらかくする ～知的障害者施設のアプローチを学ぼう～』
9月8～10日	共生社会って何だろう? ～五感で学ぶ3日間～
10月24日	先生の学校 動画取材
11月28日	HACK高林さん・伊達さんタイムトラベル100時間ツアー体験
12月13日	HACK主催ビジネスコミュニティサロン「水曜日のヨル喫茶」でのタイムトラベル100時間ツアープレスト会議
1月15日	先生の学校 動画公開 「障害のある人が「好き」に没頭できる福祉施設「たけし文化センター」。アートの手法で、障害の捉え方の転換に挑むNPO法人の取り組みとは?(となりの学校見学)」
3月30日	HACK主催ビジネスメンバーツアー







## 共生社会って何だろう？ ～五感で学ぶ3日間～

上智大学総合人間科学部社会福祉学科  
学生側企画代表者 執行健太郎



©(株)スマイルバトン

### 企画の経緯

今回のイベントのきっかけとして、レッツとの出会いが一番大きかったと思います。私は2023年4月、レッツが主催する「タイムトラベル100時間ツアー」に参加しました。大学で社会福祉学科に所属し、障害者福祉分野の学びを深めていた私は大学に入学した時から「共生社会」に関心がありました。共生社会の実現というテーマの中でも、私のこれまでの経験も影響し、「働けない人」との共生をどのように図っていくのか、どう正当化していくのか、といった事を考えていました。

障害者との共生という、どうやったら働けるようになるのかといった事に焦点が当てられることが多いと個人的には感じます。もちろん今まで十分な配慮がなかった為に働けなかった人が、社会が適切な配慮をすることによって働けるようになることは当然評価されるべきことであると思います。ですが、障害者が働くことに重点を置き生産性を強調した場合、その共生社会の「共生」には働けない人、また、働くということに対する認識が一般とは異なる人を含まない、排除の言葉になる危険性を秘めていると思います。

「タイムトラベル100時間ツアー」に参

加して、私は「まさにこれだ！」という感覚がありました。「ただそこにいる」ことを肯定された空間。生産性の有無を問うこともありません。ただ生き生きと過ごす様子は、一般的な社会福祉の現場しか見てこなかった私にとって衝撃的でした。

レッツで過ごす利用者を見てみると、自分の生き方を問われているような気がします。100時間ツアーでは、最初に詳しい説明もされず、「ルールはありません。自由に過ごしてください」と放り出されます。そして、「何かやらなきゃいけない。利用者と話さないといけない」といった考えが浮かんできて初めて、今まで自分が強迫観念に囚われていることを自覚しました。本来、やりたいことは自らの内側から湧いてくるものだと思います。自由に自己を表現しているレッツの利用者と過ごしてみても、「自分がやっていることは本当にやりたいことなのか」「周りからの圧力でやらされているのではないかなど自分を見つめ直すきっかけにもなりました。

このような取り組みをしている団体があるという事を、私は同じ社会福祉を学んでいる学生たちに伝えたいと考え、代表の久保田さんに講演を依頼しました。それまで何かイベントを企画した経験などもなかった私ですが、知ってもらいたい一心で行動

し、初めての企画を無事開催することができました。その後、久保田さんから「文化庁の人材育成事業があるんだけど」と声をかけていただき、元々はレッツで大人を対象にしていた企画があったが、その学生版を作ってみてはどうかという流れになり、今回の企画が立ち上がる事になりました。

今回のイベントのタイトルは「共生社会って何だろう？～五感で学ぶ3日間～」としましたが、他のメンバーとかなり悩んで決めました。サブタイトルに「五感」と入れたのは、参加してくれた皆さんに「机の上で学んでいても分からないことがある」ということを伝えたかったという意図があります。情報が溢れる現代では、調べれば何でも出てくるので分かった気になってしまうことが多いのではないかと思います。例えば火の熾し方は今時の小学生ならばYouTube やアニメなどで観て知っているかと思いますが、いざ材料を目の前にして火を熾せるでしょうか。同じように、「障害者」「共生」など、言葉としては概念としては知っていても、実際に関わったことがある人はどの程度いるのでしょうか、そのような人たちに実際にレッツに来て五感で体感してみたいと考えて決まったのがこのサブタイトルでした。

## どうイベントとしてまとめるか

今回の企画は、いわばタイムトラベル100時間ツアーの拡大版という様なものになると考えていました。100時間ツアーでは、スタッフが最初に懇切丁寧に説明するのではなく、参加者に自由に過ごしてもらって、参加者自らの気づきを大切にしてい

ました。しかし、今回の企画は一応「共生社会って何だろう？」とテーマが決まっているわけです。

100時間ツアーでは、参加者はレッツでの体験をより広い解釈で考えることが出来る一方で、それは参加者それぞれの感受性に一任されており、人によってはよく分からないまま終わってしまうのではないかと懸念がありました。そのため、解釈の幅を狭めてしまったとしても、一定の学び・気づきを参加者に提供するために、レッツという空間が果たしている役割や日本の社会福祉の状況などを少しだけ説明し、3日間過ごす上でのヒントのようなものを提示することにしました。

私は参加者に対して、3つ働きかけを行いました。1つ目は「自分なりのアンテナの立て方を模索してほしい」とアドバイス。2つ目は「“自由”な空間に身を置いて何を感じましたか？」と質問し、常にそれについて考えながら過ごしてもらいました。3つ目に、夜寝る前、学生だけの時間に振り返りを行ってもらいました。

1つ目の「自分なりのアンテナの立て方を模索してほしい」ということについて説明すると、レッツでは「やってはいけないこと」ということが基本的にありません。私は、100時間ツアーに参加した時に「何をすればいいんだろう」と途方に暮れていた時間がありました。レッツで十分に学びを得るためには、それぞれ自分に合った方法でレッツと関わっていく必要があると考え、自分なりのアンテナの立て方——話しかける、ぼーっとする、一緒に同じ行動を試してみる、楽器を演奏してみる——を考えながら過ごしてもらうことにしました。

2つ目の「“自由”な空間に身を置いて何を感じましたか？」という質問の意図として、「普段の自分たちがどれだけ見えないうものに囚われているか」を自覚してレッツを見てほしいという思いがありました。以前の私であれば「施設に来たのだから、利用者さんと関わらなければならない」という場面に沿った行動をしなければならないという考えに囚われていたという自己覚知がありました。これは一つの例ですが、そういったことに気づいて初めて見えてくるものもあるのではないのでしょうか。

3つ目の学生だけで行った振り返りについては、情報量の多いレッツでの体験を整理するためにも、他者の学びを聞いて、自らの学びをより明確に捉えることができるようにするという意図がありました。それぞれの立場から感じたレッツという空間での体験の共有は、私たちにさらなる気づきをもたらしたと思います。

## 学生の声

ここからは、私が学生と話した中で印象的だったことを紹介しようと思います。

### 大寺

「健常者の人との壁がないのがレッツだと思った。人と関わる時に壁があると感じているなら、それは私たちが勝手に作っている」(1日目夜振り返り場面)

### 早川

「レッツに来て、自分が無色だと気づいた」(2日目ちまた公民館にて)

### 横山

「ここでは思ったことと言えるし、言っちゃダメだと思うこともあまりなかった」(3日目)

### 参加者より

「この企画で経験したことで、人間という存在に対する考え方に大きなインパクトを私は与えられた。現代社会において人間という存在を図るものさしの中でも非常に重要視されている市場価値というものがある。資本主義社会を機能させていくためにこれが必要なものであることは事実である一方で、次第に人は「人のための社会」ではなく「社会のために必要な人間」を求められるようになってしまった。手段と目的が逆転したのである。レッツでの3日間はこのことについて体験的に、かつ感覚的に私に突き付けてきた。

この企画には明確な「始まり」がない。私は友人の紹介で急遽参加したものの、事前に施設には訪れていたのである程度勝手はわかっていたつもりであったが、それでも企画本番では何かしらの時間に則ったプログラムがあるのではないかという感覚が抜けず、時間を気にしていたことが記憶に残っている。しかしレッツではこのような時間的感覚は必ずしも必要ではない。事実このプログラムでもスタッフとの軽い挨拶はあったものの、学生は突然施設の中に放り込まれていく。となると必然的に「時間」や「プログラム」が定められていないレッツという空間で学生は「利用者の隣にいる」ことに目の前の現実の大半が占められる。どうすればいいかわからない学生たちは何もできない。しかしレッツではそれ

でいい。ただそこにいていいのだ。  
このような時間が現代社会を生きる人間に  
どれほど与えられているだろうか。利用者  
とのセッションはこの「無」から始まる。  
そこから関わり合いが生まれていくのであ  
る。」(後日、プログラムを振り返って)



## 先生の学校 YouTube 番組 「となりの学校見学」

株式会社スマイルバトン「先生の学校」運営事務局

はじめに、私たち株式会社スマイルバ  
トンは、教育メディアコミュニティ「先生の  
学校」を運営しております。「先生の学校」  
では、学校現場で奮闘する先生方に向けた  
メディアとコミュニティ運営に携わってお  
り、2023年1月にはYouTube動画の制  
作を始めました。

その動画の番組の1つである「となり  
の学校見学」にて、この度認定NPO法人  
クリエイティブサポートレッツとのコラボ  
レーションで制作をさせていただきました。  
この番組は、平日休みを取って学校やス  
クール、子どもの居場所を訪問することが  
難しい先生方の代わりに、弊社のスタッ  
フが訪問しレポートするという番組です。

今回の事業の目的は、障害をはじめとす  
るあらゆる違いを超え、誰もが自分らしく  
いられるインクルーシブな居場所につい  
ての理解と関心を深めることです。特に、ク  
リエイティブサポートレッツが運営する  
「たけし文化センター」を紹介し、その活  
動を通じてインクルーシブ教育の重要性と  
実践のあり方について広く伝えることを目  
的としました。

本動画では、たけし文化センターの日常  
風景、そこで行われている様々なプログラ  
ムや活動、そこで働くスタッフや見学者の

声を通じて、インクルーシブな社会づく  
りに向けたレッツの取り組みを紹介してい  
ます。動画コンテンツを選んだ理由は、文  
字や写真だけでは伝わりにくい、現場の雰  
囲気やスタッフや利用者の方のエネルギー  
をより直接的に感じていただくためです。

動画コンテンツを選択したもう一つの経  
緯として、当初、本人材育成の企画は、ク  
リエイティブサポートレッツを現地で体験  
するイベントと、それにまつわるオンライ  
ン事前学習をハイブリッドで行う想定をし  
ておりました。しかし集客を始めると、  
学校現場で働く先生方たちの関心は高か  
ったものの、レッツを訪れることで、先生  
方にどのような学びが得られるのかとい  
うイメージがつきづらかったり、日程や地  
理的な理由もあり、思ったように集客が  
できなかったという実情がありました。

それを踏まえて、レッツの取り組みや  
たけし文化センターに興味を持ち、「いつ  
か行ってみたい」と感じてもらえるよう  
な橋渡しとして、現場の様子をリアルに  
お伝えできる動画コンテンツの制作に  
踏み込んだという形です。

本プロジェクトで制作した動画を1月  
に公開し、2カ月が経過した3月上旬現在、  
420回ほど視聴されています。動画を通し

で、先生たちはもちろん教育に関心のある方が、リアルに「誰もが自分らしくいられる場所」を感じることができ、ある公立小学校の先生からは「教育の原点に立ち返ることができる動画だった」という声が、また教育に関心があり、先生の学校を応援してくれている、会社の経営者の方からは「とても学びになった。たけし文化センターのような居場所がもっと社会に広がってほしい」というメッセージが届いています。

動画を制作することで、実際の実践の様子を視覚的に理解でき、視聴者が自身の経験と照らし合わせながら、自分の教育観を見つめるきっかけとなったことが分かりました。

クリエイティブサポートレッツとのコラボレーションは、「先生の学校」にとっても「一人ひとりのありのままの姿が輝く場所」を取材させていただき、貴重な機会を得ることができました。一方で動画視聴回数の増加スピードは、想定よりも遅いようにも感じています。本動画が、教育現場で直面する多様性と包摂に関する課題への理解を深め、先生たちがこれらの課題に対してより積極的に取り組むための橋渡し役にはなりつつあります。その一方で、学校現場の先生方にインクルーシブな学び場を実現する姿勢を育むには、まなざしを育むだけではなく、広く学校現場が多様な子どもを受け入れる環境づくりの重要性を訴えていく必要があると感じています。

### 先生の学校 YouTube 番組「となりの学校見学」

内容：障害のある人が「好き」に没頭できる福祉施設「たけし文化センター」。  
アートの手法で、障害の捉え方の転換に挑む NPO 法人の取り組みとは？

制作撮影地：静岡県浜松市・たけし文化センター連尺町

撮影日：2023 年 10 月

公開日：2024 年 1 月

動画 URL：<https://youtu.be/fz0I9UXkBI?si=-bJi6Au2CET4h-44>



## 株式会社 HACK × タイムトラベル 100 時間ツアー

NPO 法人クリエイティブサポートレッツ 久保田瑛

### 内容

浜松市を中心にしたまちづくりを手がける株式会社HACK（以下HACK）とレッツがコラボしビジネスパーソンが参加したくなるタイムトラベル100時間ツアー事業を実施した。特にビジネスパーソンを対象にした観光ツアーの企画をHACKとともに構想。またHACKスタッフ2人には事前に丸1日レッツに観光してもらい、どのような発見・体験があったかを提案書としてまとめもらった。12月13日には、HACKが毎週開催する交流サロン「水曜日のヨル喫茶」にて、20名の参加者たちと企画内容をブレスト。その内容をもとに3月30日に浜松市内の中小企業の役員や経営者社長総勢5名を対象にプレ観光ツアーを開催した。

### HACKメンバーが 丸1日滞在してみた感想

HACK メンバーからは創業 150 年の飲食・ブライダル業を営む（株）鳥善の伊達さん、不動産やまちづくりコーディネートを担当する高林さんが参加。最初アルス・ノヴァの1日がスケジュールや目的がないことに困惑したという。ただ、時間が経つにつれ、障害があるメンバーと一緒にエ

アロビをして身体を動かしたり、言葉だけではなくコミュニケーションをしたりする中で、次第に【心理的安全】を感じたという。この感覚は、組織で働く社員たちの社内コミュニティの改善に何か一石を投じることができるのではないか、と2人は語っていた。

### 20名のビジネスパーソンたちとの ブレスト会議を通じて

金融、建築、生産業などさまざまな職種の方と観光ツアーについて話し合った「水曜日のヨル喫茶」が12月13日に開催された。前半はレッツの紹介とHACKの2人からツアーに参加した感想を紹介。そして後半では、「ビジネスモデルとしてどのように観光ツアーを仕立てることができるか」というブレスト会議を行った。

参加者からは「社内でコミュニケーションに悩んでいる人、将来マネージャーや次世代経営者になる人などに研修として参加してもらうのはどうか」「人は変わらないが、自分を変えられるという感覚を会社のTOPが経験するプレミアム感があるのがいい」「逆に大企業がこのプロジェクトに1千万円のお金を出したら何ができるかを考えてみるのはどうか？お金も出すし口も

出す、その中で何が提案できるか」など様々な意見や提案が出て、難しいプレストにも関わらず会は盛り上がりを見せた。

## 概要

期間：2023年9月～2024年3月

共催：株式会社 HACK

対象：ビジネスパーソン（水曜日のヨル喫茶に参加している方々）

### <スケジュール>

2023年11月28日（火）

HACK 高林さん・伊達さん 1日タイムトラベル 100時間ツアー体験

12月13日（水）

水曜日のヨル喫茶でのタイムトラベル 100時間ツアープレスト会議

ゲスト 4名レッツ及び100時間ツアー紹介+参加者 20名によるワークショップ

2024年3月30日（土）

プレツアー開催

- I. 対象：中小企業の役員や経営者
- II. 内容：100時間ツアーを体験してもらい、どのような価値が各社にあるかプレスト
- III. HACK とレッツ間の振り返り

## 企業向けの ラーニングプログラム企画

株式会社 HACK 高林健太、伊達善隆

レッツからのお誘いを受け、私たちはたけし文化センター連尺町での経験を通して、企業向けのラーニングプログラムの企画とテストを行いました。既存の「タイムトラベル 100時間ツアー」を参考にし、これまでレッツが接点の少なかったビジネスパーソンとの新しいつながり方に焦点を当てた実験と位置づけています。

街の多様な生活者がまちづくりに参加するためには、企業の力を活用することが有益です。しかし、現実には生活者と企業の取組みの接点を上手にデザインすることは簡単ではありません。この課題に対処するためには、企業で働く一人ひとりが自分も一人の生活者であることを再認識し、街なかに見え隠れする多様な価値観を理解し、共生社会に向けてソーシャルスキルを磨くことが初めの一歩と考えます。

私たち自身もたけし文化センター連尺町での滞在中、知的障害のある方との言葉を越えたコミュニケーションから新たな気づきが生まれました。この経験を通して、初対面時の困惑から観察、そして交流へと心の動きが移り変わり、自分が相手やその場に受け入れられる感覚や心理的安全性が育まれるプロセスに触れました。これを企業活動や組織デザインに応用することで、参加者が挑戦や勇気を出して一歩踏み

込むことの大切さを自認する経験を提供できればと考えています。

HACK が主催する「水曜日のヨル喫茶」で、ビジネスパーソンを中心にした参加者約 20名と共にブレインストーミングを行い、様々な視点からの意見を集約。その後、5名の経営層の方々と共にたけし文化センター連尺町での滞在中に感じたことを共有するワークショップを開催し、企業研修への応用についてディスカッションを行いました。

今後はテストの結果を踏まえ、プログラムをより磨き上げていく予定です。このプログラムが浜松の共生社会実現の一助となることを願って。

## 福祉のはぐれものの会

NPO 法人クリエイティブサポートレッツ 曾布川祐

### はぐれものとは、 なにものなのか？

2023年度、クリエイティブサポートレッツの呼びかけにより、福祉業界の「はぐれもの」を自称する(?)人たちが集まって「はぐれものの会(仮)」なるものが結成された。要するに、意識的にせよそうでないにせよ、自分が福祉業界のメインストリームから外れていることを自覚している人たちがこれを機に集まり、話し合う場が生まれたのである。

しかし、この「はぐれものの会(仮)」という呼称にはどこか「被害者の会」といった響きがないでもない。そこには潜在的に「わたしたちがはぐれているのは、より大きな集団=マジョリティの側に原因がある」という考えがあるのではないか。この未だ声になっていない潜在的な主張には、どこまで正当性を期待できるだろうか。

「はぐれもの」は、変わり者、異端の人、仲間外れ、という意味だ。それは、はぐれもの自身の視点だけで得られるアイデンティティではない。「はぐれもの」という言葉には、はぐれていない人たちがはぐれている人たちを見るその視線が必要になる。要するに「はぐれもの」になるためには「はぐれていない人たち(この言葉は、必

然的に複数形になる)」の存在が必要不可欠であり、わたしたちが「はぐれている」と主張するその自覚には「はぐれていない人たち」の存在が先立つのである。一般的に、「はぐれもの」はその概念的な成立順序が反映されて、「はぐれていない人たち」に対する劣性が刻印されているように感じられる。当然、「はぐれていない人たち」という言葉は、「はぐれもの」の後に来るものだが、その存在自体は必然的に「はぐれもの」に先立つものであり、「はぐれもの」は後から来たにも関わらず、先にあった「はぐれていない人たち」に批判的な目を向けているのだ、と。

しかし、ここには概念のロジックがある。我々「はぐれもの」は改めてこう問うべきだろう。本当にわたしたちは、「はぐれていない人たち」の後に現れたのか？と。

恐らく、本当は実は、「はぐれもの」は初めからいたのだ。それは、初めからはぐれていたという意味ではない。初め、「はぐれもの」は決してはぐれることなく、自身が「はぐれもの」であるというアイデンティティを成立させるための視線を受けることもなく、そもそもその視線を注ぐはずの「はぐれていない人たち」は、初めはいなかったのだ。「はぐれていない人たち」は後から現れ、「はぐれもの」がはぐれざるを得

なくなるような囲いを作り、それによって「はぐれもの」を生み出したのだ。たとえ、「はぐれもの」が初めからなにも変わっていないのだとしても、その扱いは外側から変えられたのである。

だから(と言うでもないが)、「はぐれものの会(仮)」に「被害者の会」の響きがあること、「わたしたちがはぐれているのは、より大きな集団=マジョリティの側に原因がある」と主張することには、ある程度の正当性があると言えよう。

※はぐれものの会(仮)… クリエイティブサポートレッツの呼びかけで集まった障がい福祉業界で働く人たちのオルタナティブな意見共有の場。オンラインも含めて過去数度集まって、それぞれの「障がい福祉」に対する思いを交換している。来年度は複数事業所に勤めるスタッフをまたいでの合宿などを計画している。

## 「こここ」との人材育成プログラム開発

NPO 法人クリエイティブサポートレッツ 水越雅人

福祉をたずねるクリエイティブマガジン「こここ」さんは、「個と個と一緒にできること」を合言葉に掲げて2021年4月に創刊したウェブマガジン。

そんな「こここ」さんに「人材育成プログラム」企画立案を依頼し、提案のあった案などをもとに打合せを重ねた。結果、企画が固まるまでには至らなかったが、互いの活動の核や観光プログラムの強みや弱み、集客アイデアなど意見を交換することができ、今後に向けてこの1年で足場を固めることができた。

あわせて、「こここ」さんのサイトに、レッツ代表の久保田の記事やレッツが運営する障害福祉サービス事業所アルス・ノヴァの利用者さんの連載、レッツで開催したイベントに関する記事などが掲載され、レッツとの協働作業が社会に発信された。



#3 「表現未満、」の場を学びに

## タイムトラベル 100時間ツアー

column

今年度で7年目を迎えた「タイムトラベル100時間ツアー」！コロナ禍も開け、毎月たくさんのお客さんがたけし文化センターを訪れました。レッツ社内での観光担当は月交代制。月ごとに異なるスタッフが新たに観光プランを作り直し、それぞれの思う「クリエイティブサポートレッツ」を紹介します。

それぞれの観光担当者が、ツアー後の感想をまとめていますので、興味のある方は是非一読ください。そして、是非ともたけし文化センターをお訪ねください。

## 【4月観光】

山あり谷あり春のゲキレッツ☆ゲリラツアー!!  
レポート2023

去る4月21、22日に行われたタイムトラベル観光ツアーのレポートです! ツアコンは準備でバタバタ自転車で走り回っていたフキコです。

## 【1日目】

ポカポカ陽気の夏日のような観光日和! たけし文化センターに集まったのは、福祉を学ぶ大学生しぎょーくんと、障害者芸術の研究をしている女性このかさん、そのお母さんと重度知的障害の息子さんがいるけいこさんの3名が偶然みなさん東京から参加してくれました。

カオスの中に突然放り込まれ自らが何かを見つけ出す、それがレッツ観光。しかし私は観光客を放流しつつも様々な機会に自然にアシストするのが苦手。が、朝から準備で自転車で走り回っていたせいでヘトヘトで、図らずも初日の午前中はみんなが各々のペースでアルス・ノヴァをじっくり体験する時間となりました。

アルス・ノヴァの洗礼とも言える平子さんば。ずっと手を引かれてひたすら散歩、帰ってきたと思いきや2巡目が始まる。まいさんとジュースを買いに行ったり、まーくんのお人形トークに巻き込まれたり。ゆうじさんのカキカキの横で自分も絵を描いたり。

お客さんが何したらいいか戸惑っているとついあぁだこうだうずうずバタバタしてしまうわたしですが、スタッフに「この人はこういう人でこう面白いんです!」と言われたら良くも悪くも分かった気になってしまうので、わからないなりに探って過ごしてみるみたいなこういう最初の時間も大切な~と思います。

午後は街中から車で15分くらいのところにあるアルス・ノヴァ入野に移動して、最近にわかにプチ登山活動にハマっているメンバーたちと行き先不明のハラハラゲリラ登山へ。(サトちゃんには顔をあわせるたびに「次いつ山登る?」と言われる。) というのも、先日、静岡県で一番低い山が佐鳴湖にあるのでそこを登山しようと車で向かったところ道に迷い、なんかよくわからない湿地についたということがあり。そこでなんか山の中に入る道があるぞ…! と新発見をしたので今回はその道を登ってみることに。一体何があるのか。新緑の中グングン進みます。

山の斜面にホウライチクという竹がめちゃくちゃ生えていた。古くは火縄銃に使われていたらしい。水鉄砲に使うのに最適ということでサトちゃ

んが興味津々でした。

あてどなく森の中を歩く一行。いったいこれはどこに行くんだ? と一抹の不安を覚えたけいこさんがマップで調べてくれて(笑)、なんと佐鳴湖の西岸には小高い山々が広がっていてぐるっとハイキングできるように整備されていることがわかる。登っていくと突然住宅地の付近にポンッと出た!! よくみると里山のいたるところに入り口? 出口? があり、どこに繋がっているかわからないから面白い。みなさんも今の新緑の季節、ぜひ探検してみてください。

ちなみにわたしの顔見ると「山は?」と言ってくるサトちゃんだが、いざ山歩きするとなんか不安そうな顔をしている。階段降りるときわたしが小脇に抱えて降りたりしなければいけないようなこともあり、毎度(怖かったかな? 山あんまりだったかな?) とこちららも不安になるのだが、帰ってくると「また行きたい!」と言う。で、また会うたび「山はいつ行く?」と言う。そしてわたしは行くたびにまた微妙な表情のサトちゃんを見て不安になる…を繰り返している。なんやかんや楽しいのだが。

目的地もなく気持ちも揺れながら山を歩く、そんな調子でいつもやっているの、観光客の3人もまさにハラハラだったであろう…。

そのあとは、思いの外暑くって一同バテバテになったので、スーパーで棒アイスを買ってみんなで湖畔で休憩。ひとりハーゲンダッツを欲するまーくんをいなしてガリガリ君と抹茶パルムを購入。水面を眺めながらアイス、一気に夏の気分~!

気づいたらまーくんとこのかさんが水切りしてた。水切っていうか、ほぼ石を投げ込んでいた。笑。このあとみんな参戦し始める。

入野ともお別れし、夕方からはたけぶん3階のシェアハウスの住人まいさんとアルス・ノヴァ ULTRA のヘルパーのお買物に同行。この日は海外の謎の紐グミとイカソーメンを購入していた。本当に謎の食い合わせである。スライスチーズ6枚と刺身とか。この日はかなりアグレッシブな日、まいさんのその勇ましい姿と、テキパキとやりとりするヘルパーに若干タジタジの3人。

1日目の終わりは実はふきこプレゼンツ「スナックありじごく」をやる予定でスーパーで飲み物など買っていたのだが、日中思いの外陽を浴びすぎてヘトヘトになってきてどんどん正気を失っていきふきこ。3人が心配して「外で食べてもいいですよ! 解散でも!」と言ってくれているがいやツアコンとしてどうなんだ…と悩んでいるうちにスタッフのみんなとともに餃子屋に行くことに。スナックみたいな餃子屋さんでした。みんなありがとう…。肉巻き餃子(餃子なのか?) が美味しかった。この時のことをこのかさん

がまとめの日記に書いてくれていた。へべれけになるふきこ。

## 【2日目】

2日目はアルス・ノヴァは半日営業日。午前中は2階の音楽部屋で突然音楽が始まったり、リョウガくんのカレンダー貼りを眺めたりとのんびりなスタート。

いつもレッツ観光の時悩むのが、アルス・ノヴァで巻き起こる「オォッ！これは…！」という「光」は、マジで光の速さというか、突然起こってすごい勢いで光って去っていくので「これぜひ見てほしいです！」とみんなを連れてきた頃には輝きを失っていることが多い。あとそもそも彼らの魅力だな～と思うところは日常的にともにいてじわじわ感じる人が多いので、「今から彼のこの行動見てください！」もどうなんだ？と思う。おすすめして、見たかったら見るし、見なかったとてそれでもいい。その人は別の何かを見ているかもしれない。そんな感じでいいのだろう。いやしかし私は結局「この輝き見ててください！」と言ってしまい、結果（なんか伝わんなかった気がするな…）とか思っている。この時も耐えきれず「今からリョウガがカレンダー貼るんで…」と3人とも連れて行った。

午前の目玉企画「恋愛妄想詩人ムラキングの詩のワークショップ」。これも事前に依頼しておらず、朝ムラキングさんの顔を見て（ムラキングさんワークショップやってくれないかな…）と思ったトンデモゲリラなのだが、「なんか観光だしやりたいなと思ってました～」と快く請け負ってくださったムラキングさん！ありがとうございます！どんな詩になったかは…またどこかで。

ちまた公民館にも寄ってみんなでおしゃべり。ここでしぎょーくんの心にいろんな言葉が刺さった模様。

最後のプログラムはこれもゲリラ！3階で過ごしているたけしくんのヘルパーさんたちに突撃！千葉から来ている元シェアハウス住人こうやさんに重度知的障害の人の自立生活、そのヘルパーとして考えること、そして話は悩める大学生の「今後どうしていったらよいか…」という悩み相談へ。福祉業界に飛び込んで行こうか、それとも研究をしようか。自身の思いと周囲の意見に揺れる若者に、こうやさんもわたしも大いに悩める大学院生をしていた経験があるので、「研究もして現場もあって、という生き方もあるよ」「失敗を恐れるな！とよく言うが、何回も同じ失敗を繰り返しているのだから、失敗を生かさないと、という考えもいらないよ！」みたいな話が繰り返されました。

今回の観光は3名とも福祉ととても関わりの深い人々が集まった会とな

りました。己とレッツの一对一の真っ向勝負も良いのですが、こうした偶然の出会いや、立場が似て非なる人とレッツという場を体感し「自立とは何か」「自由とはどういうことか」など意見を交わし合うというものの観光の醍醐味だと思っています。

そして、障害有る無し関係なく、人には本来様々な選択肢があり、その選択肢を日々増やしていくような活動が観光に出来れば良いなと思ったのだった。

しかしながら本当にこうして見ると即興の連続だった…。皆さんありがとうございました～！

高木路子

.....

## 5月の観光レポート、のようなもの。

わたしたちは理解できないものを見るができない。

2023年5月19, 20日 タイムトラベル 100 時間ツアー

クリエイティブサポートレッツに就職してから、はじめての観光担当としてのツアーコンだった。お客さんからの感想は上々で、自分としても楽しくやらせてもらったのだが、何かスッキリしないものがある。わたしは何を見てもらいたかったのか？何を体験して欲しかったのか？もしかすると、わたしたちの日常が、非日常を体験しに来た人たちのそれによって、何か「お洒落なもの」「文化的なもの」「アートっぽい空気」みたいな出来合いのものに当て嵌められてしまったのではないか？

しかし、「観光」あるいは「観光地」というのは、得てしてそういうものではないだろうか。そこにある「驚き」は、ある程度予定されていたものの確認という要素を含むということが、「観光」というものの真っ当な在り方ではないだろうか。そこにある「驚き」には初めから筋書きがあって演じられるものである程度以上予定されている。そのことに改めて失望するのは、あまりにも初心（うぶ）な反応だということにもなるのだろう。

しかし、「ありのまま」とか「自由」とか「純粹」とか、そういう予め用意された言葉に回収されない肌理（きめ）のようなものをどうしたら「見る」ことができるだろうか。もちろん、観光に参加してくれた人たちの見たものには多様性があるだろう。それは必ずしも上記のような通り一辺倒

な言葉に還元されるようなものではあるまい。それに、体験には常に言葉では表現され得ないフェーズがある。それは感想のような形で共有はできないものだが、体験者の中に残り続けるだろう。一泊二日の観光旅行に、どうしたらそれ以上のことを要求できるだろう。わたしの抱えているもやもやは正当なものなのか。

はじめて見るものに囲まれながら、知覚の中に己を分散させてヘトヘトになること。理解できないものを持ち帰って、何年かけてもそれを理解できるものに変えていくこと。

わたしたちは理解できないものを見ることができない。理解できないものには、そもそも焦点を合わせることができないからだ。わたしたちが見るのは理解できるものに限られる。わたしたちの知覚は、わたしたち自身を切り分けて分散することによって得られる。理解できるものとは、自分と共通する何かを持つものことだ。もし、目の前にあるものを、自分と共通するものを持たないものとして彼岸に押しやるならば、それはいつまでも理解できないモザイクのままだろう。それとは反対に、目の前のモザイクを即座に理解できるものに変えようと思うならば、すでに自分が知っているものによってそれを評価することになるだろう。そうなれば、それを不当な場所に押しやって良しとすることになるだろう。

問題は、時間をかけることだ。「見たことがないものを見る」、「知らなかったことを知る」ために必要なのは、ロジックではない。それを否定性(=「～ではないもの」)によって取り囲んで理解した気になっても虚しい。わたしたちは、生まれてからさまざまなものを「見る」「知る」ようになるまで、大変な時間をかける。おっばい、母親、父親、車、ご飯、犬、猫、文字、数字、政治…。それが見えるものとして、理解できるものとして、像を結ぶようになるには、それがじわーっと滲み出てくるまでの計算しような時間がかかることが求められる。そのためには、一泊二日という時間はきっと短すぎるのだろうし、それが100時間であったとしても恐らくあまり変わらないだろう。

「見えるもの」の背後で何やら蠢いていたモザイク、見ようとした「鮮明なもの」を遮って邪魔してくるモザイク、ただただ何の像も結ぶことのないモザイク、そういったものを持ち帰って、いつかまた別の時間、別の場所で出会ったモザイクにそれが像として重なったときに、それは「見えるもの」になるのかもしれない。今はそういった素敵な出来事が、多くの人たちの日常になるような社会の到来を期待しよう。たけし文化センターでできる体験は、必ずしも他の場所では体験できないものというわ

けではないだろう。しかし、ここだからこそ鍛えられる視力というものはあるに違いない。わたしたちは光学的になんでも見ることが出来る目を持っているつもりでいながら、その実、常に条件づけられたものしか見ることが出来ない。今回のツアーが、その条件が変化する一因になることが出来たとしたら、やった甲斐があったというものだと思うのだが、果たしてどうだったのだろうか。もちろん、今は何も結論付けられない。

曾布川祐

## 10月観光振り返りなやつ

レッツ正社員になり初めてのツアーコンをしたキイチです。実は観光1週間前に凸凹祭りが行われていて、少しばかり担当でもあったので激動の観光ツアーでした！予定は組んでいたけど予定通りに進んだような進んでないような…(きっと上手いこといっていない) そんなツアーでしたが掛川で行われた「ちっちゃな文化展」や平子タイム、遠州灘などに助けられました。皆さまご参加ありがとうございました！

余談ですが、さわやかのお肉焼いている所って外から観れるし写真撮れるそうですよ。26年遠州に住んでいますが初めて知りました。

櫻井喜維智

## 11月ツアーレポート

ツアーコンの瑛です。さて、11月17・18日、狂喜乱舞！秋のタイムトラベル100時間ツアーが開催されました。

いやあ、今回のツアーは結構カオスだったんじゃないでしょうか。少なくとも私はヘトヘトになりました。今回のツアーの目玉は、アルス・ノヴァメンバーたちとハプニングあり、笑いありの総勢40名近くで行くマクドナルドでランチ大豪遊。そして、浜松の新スポット、ZINEやシルクスクリンが作成できるスペース「プスプス by ZING」の1周年記念イベントに参加すること！

10年以上営業しているアルス・ノヴァでもこの人数でマクドナルドに行くのは初とのこと。1週間前から、準備したりメニュー決めに悩み、毎日

私にメニューを聞くメンバーも。

それぞれ1000円以内で好きなメニューを選びます!豪華!

今回のツアーは、大学生や文化関係、教育関係の方など20代~40代の5名が遠方から参加してくれました。そして1日目は、たけし文化センター連尺町や入野町の拠点をゆっくり観光します。

また公民館で、中学生と小さい折鶴を折ったり、詩のワークショップに参加したりとどっぷり普段の日常を楽しみます。

そして夕方からはレッツが別事業で開催しているトークイベントに参加。静岡市にある古本屋「水曜文庫」さんをゲストに呼んだトークでは、大学生たちが学んできたことがない70年代の学生運動の話や「アヴァンギャルド」についての話題に。特に20代の学生さんたちは、初めてのお話にぐるぐる頭を回して、驚いていました。

そして2日目は、朝から大忙し!

まず、全員でマクドナルドに行くのは難しいという事前リサーチから生まれた戦法が、グループごとに分かれて時間差で突(凸)すること!!5~6グループに分かれていざ出陣です。

否めない輩感。側から見たら絶対怖い。みんな目がバキバキ!気合い十分です!!!!アルス・ノヴァメンバーと観光ツアー参加者の皆さん、各班それぞれマクドナルドを楽しむ!私たちの班は現地でテーブルを囲んでいざ食事!いい食べっぷり!!!

お持ち帰りしてゆっくり食べる派のグループもありました。毎週マクドナルドに来ている常連の太田さん。1人席で慣れたもの。これぞ優雅ランチタイム。。。

さて!!各班が揃って食べ終わったのが14時!さあこっからプスプスbyZINGに出発です。この日は浜松らしい強風で寒い日でしたが、徒歩15分程度なので歩いて向かいます。

プスプスは大盛況です!全国から集まったZINEにアルス・ノヴァメンバーもツアーの皆さんも大興奮。その場でシルクスクリーンWSを体験する参加者の方も!

盛りだくさんな1日となった2日目。最後はみんなで振り返りと代表久保田の話聞いて終了は18時!いつもの観光ツアーより長い時間になりましたが皆さんの感想から「ゆっくり滞在でき、障害がある人と一緒に時間を過ごせて、たくさんの体験をした。消化するのに時間がかかる」や「大満足!またきます!」との嬉しいお声もいただきました。

ツアーコンの趣向から、たけし文化センター連尺町以外の浜松の面白ス

ポット体験も盛り込んだ今回のツアー。ヘトヘトになりましたが、たまには、全員でのお出かけも楽しいですね!次回の面白スポットはどこにしようか今から考え中です。

皆さんありがとうございましたー!

久保田瑛

## 12月のタイムトラベル100時間ツアー

福島県楢葉町や楢葉町にゆかりがある皆様が、はるばる浜松までお越し下さいました。到着早々に堤君のカレンダー作り。沢山描いて下さいました。

怒涛の巻き込み型音楽ライブ。今回はタムラムラの練習も行われていました。

ムラキングの詩のワークショップ!またもやファンを増やしましたよ、彼は。夜は餃子を食べながら動画会。お土産でいただいた福島県「ふたばの里」さんのお豆腐と、牧之原市の「一如」さんのお味噌を使った最強コラボのお味噌汁も好評でした。

翌日は朝から街歩き。もちろんプスプスにも立ち寄りしました。

観光のメに描く旅の記録「イチヨウの葉を見つけた新居君と新聞紙を破く壮君、階段上から見つめるU5君」似ている!

俊介君と街の音を聞きながら、俊介君のペースに合わせてじっくりゆっくり歩いて下さっていました。

私も色々勉強させていただきました。皆様ありがとうございました。

尾張美途

## 2月のタイムトラベル100時間ツアー

2月のタイムトラベル100時間ツアーを16日と17日で開催しました!

KYさんの館内迷宮入り案内にはじまり、3をたくさん描き、散歩にたくさん歩き、浜で砂をかぶり、たけしさんのショッピングセンターツアー、振る舞いワイルドティー、ムラキングさんの詩のワークショップ、そして午後のクラブイベント!…と終わってみれば充実のツアーになりました。

来月3月はお休みです。タイムトラベル100時間ツアーの4月以降の予定は近日中に発表します。またのお申し込みお待ちしております。

竹内聡

